

巻頭説教

「罪へと誘惑するもの」

創世記 3 章 1～7 節 コリントの信徒への手紙二 11 章 2～3 節

牧 師小野寺 泉 説教代読杉山綾子

はじめに

今朝は、創世記 3 章 1 から 7 節を読みました。そこには、蛇が女を誘惑し、女も男も主なる神に対して罪を犯したことがいわれていました。いわゆる原罪について語っている箇所です。

この箇所は、紀元前 1000 年から始まるダビデ王朝時代に書かれた歴史書の一部がもとになっています。その時代の人々は、神が良い者として創造した人間が、どうして罪を犯すようになるのか。さらに、そもそも罪とは何であり、一体、どこから来るのか。そういうことを神の御前で問題にしました。

こうした問いかけは、今日でも大切です。今日においても、人は何故罪を犯すかと思えますし、そもそも罪とはどうして起こるのか、といったことを考えます。例えば、先週の 8 月 15 日は終戦記念日でした。今年は特に戦後 80 年ですので、改めて平和について考えるために、新聞やテレビは、アジア・太平洋戦争について特集を組んだりしていました。その中でも、どうして人は戦争を起こすのか、何故人は、国家全体で人を殺すような罪を犯すのか、そういうことが問題となるわけです。つまり人には、何故罪を犯すのかと言う問いがあるわけです。その意味で創世記 3 章 1 節以下の記事は、決して、古代人の考えた神話や、お話といったものではありません。神の光のもとで、まさしく罪というものについて明確に語っています。

I

そこで聖書を見てみると、まず蛇について語っています。これは一見すると唐突に感じます。しかし実は、すでに前の 2 章 18 節以下で語られていました。主なる神は、人が独りでいるのは良くないと思い、人に合う助ける者を造ろう、ということで、土から野の生き物を造り、それらの野の生き物を人間の所に連れてきたわけです。ですからアダムと女の周りには、すでに野の生き物たちがいるわけです。そしてその中に蛇も、またいたのです。

蛇については、蛇を神としてあがめる、蛇神（へびがみ）信仰が昔から世界中にありました。ここでは詳しく申し上げられませんが、「蛇」は水や雨をつかさどる神々の一つであって、癒しや知恵、

不死や永遠の命の象徴と、考えられてきました。例えば、国際保健機関である WHO のシンボルマークには、ギリシア神話の中に登場する医術の神アスクレ・ピオスのもっていた杖が描かれています。その杖には蛇が巻き付いています。蛇は、医術の知恵を与えるもの、癒しの知恵を与えるものと考えられてきたからです。もちろん WHO が蛇信仰をもっているわけではありません。西洋の医学が、古代ギリシアに遡り、知恵や癒しのイメージを示そうとしているわけです。そのように蛇にまつわる信仰は沢山あるわけです。しかし聖書は、この蛇について、はっきりと、主なる神が創造した野の生き物のうちの一つが蛇であるといっています。蛇は神々の一つではなく被造物です。なるほど蛇には人間から見ると不思議な能力や知恵があるように思いますが、そうであっても、蛇は単なる被造物に過ぎず、神の御支配の下にいます。

II

聖書は、蛇について、特にその賢さに注目しています。主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いものは蛇であった、といっているとおりです。では、その蛇の賢さとは、どのようなものでしょうか。それは、何よりも、蛇が人間と話が出来るという点にあります。他の野の生き物は人間と話すことはできません。ただ蛇だけが、人間と対話することが出来るのです。しかし、またそうは言っても、蛇は、人間よりも劣った存在です。人間は「神のかたち」に造られました。そのため人間は、神と言葉をかわして交わることができます。しかし、蛇には神と言葉をかわして交わることができません。そういう限界があるのです。蛇は人間になら話することができるので、ここで、女に語りかけたわけです。

蛇が人間と話しをすることができるのは、蛇と人間との間には共通点があるためです。蛇も人間も、共に「土の塵」から神によって創造された者たちです。ですから「土の塵」という共通点があります。そのため蛇は人間と話をすることが出来るわけです。蛇との会話の中で、人間の内側にも蛇のような思考が生まれます。そうすると、蛇は人間の外側にいる生き物ですが、あたかも蛇は人間の内側にもいるよ

うなあり様になります。

ところで「土の塵」は、もしも神が創造の御業を行わないなら、「土の塵」は「土の塵」のままです。また被造物も、もしも神が創造の御業を行わず、その存在を保ち、支えないのであれば、被造物は「土の塵」に向かって分解していき、ついに無になっていきます。ですから「蛇の賢さ」は、そのような「土の塵」の賢さであって、いわば神の創造の御業に逆行するものの賢さである、そういうことができます。これは絵空事ではありません。例えば、今日のわたしたち自身もアダムたちと同じく神によって「土の塵」から造られました。私たちは様々な事情で、健やかな自尊感情を壊され、生きる意欲を削ぎ落とされるとき、「生きていてもしかたがない」とか「死んだほうがましだ、死にたい」といった悲観的なことを考えたりするわけです。それが、まさに「土の塵」に向かって分解していくというマイナスの力なのです。そしてわたしたちがそのようなマイナスの力にもかかわらず、日々生きているのは、主なる神が、わたしたち人間を生かそうとして、今日においても創造の御業を行い、わたしたちを保ち、支え、導いているからに他なりません。

エーリッヒ・フロムというユダヤ教徒で精神科のお医者さんがいます。この人は、仕事柄、沢山の人の心の有様を見てきました。そして人間の心には、＜ネクロ・フィリア＞といって「死滅することを、愛する」傾向があること、また＜ヴァイオ・フィリア＞といって「生きることを、愛する」傾向があることを発見しました。これが「土の塵」に解体する傾向を見つめる上で参考になります。それにならって申し上げますと、わたしたちは、主なる神が＜ネクロ・フィリア＞、つまり「死滅することを愛する」から、＜ヴァイオ・フィリア＞「生きることへの愛」に向かって方向転換してくださる、そういう非常にダイナミックな恵みあずかっています。「土の塵」に向かって解体していくという方向から、神の創造のお働きによって、新しく生きるという方向へ導き返さるのです。こうしたことは、もちろん人間の代表であるアダムと女についてもいえることなのです。彼らは神によって「土の塵」から創造された者たちだからなのです。

III

さて、ところで蛇は、女に向かって語りかけました。「園のどの木からも食べてはいけない。などと神はいわれたのですか」そのようにいったのです。これは、主なる神の御心と違っています。主なる神は、2章17節で「園のすべての木から取って食べなさい」と言いました。これが主の御心です。つまり、人が食べて生きることを神は求めておられます。「土の塵」に向かって解体していくことを望んではないのです。したがってまた続きの「ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べる必ず死

んでしまう」という御言葉も、やはり人が食べて生きることを望んでおられることを示しています。ところが蛇は、その逆をいうのです。あたかも主なる神は、人が食べて生きることを望んではないような言い分です。何故、蛇がそのような問いかけを思いついたのかは、分かりません。

けれども、蛇のいっていることは、神の御心を無視するもの、あるいは御心を誤解しているものであり、養い主である神を侮辱するものですらあります。だからこそ女は直ちに反論するわけです。アダムに尋ねるわけでも、主なる神の御言葉を想起して語るのではなく、いわば自分で神を弁護する役目をかってでて答えています。もちろんそこには義憤があったと思ってよいのです。そのため女は、神の言葉をそのまま繰り返して伝えるのではなく、神の言葉から離れて自分の理解していることを告げました。養い主としての神の言葉をそのまま伝えるよりも、「食べてはならない。触れてもならない。死んではならない」と自分の考えをいうのです。この時、間髪をいれず、蛇はいうのです。木の実を食べても「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知る者となることを神は御存じなのだ」というのです。この蛇の言葉に、女は騙されてしまうのです。主なる神は木の実からとって食べたら死ぬといっているのに、蛇は決して死なないという、女は動揺してしまったのです。つまり、この時、女は、神が養い主として自分たちを愛してくださっている、ということへの不信をもったのです。そこから、自分たちは「神のように善悪を知る者になりたい」と思うようになったのです。こうして女と男は、遂に木の実を食べてしまいます。アダムと女は自分たちが「神のように善悪を知る者」となった、と思うのです。

この「神のように、善悪を知る者になる」とは、自己・神格化して神と同じになるということです。例えば、私たちであっても、神の御心になっていると、思い込んだとき、この高慢さが、自己神格化に近づいていることなのです。神と同じになれば、もはや神の言葉に聞き従うことはなくなります。こうして神との言葉による交わりを投げ捨ててしまうのです。命の源である神と交わりを失い、アダムも女も死ぬものになるのです。つまり絶えず「土の塵」へと解体していくという、死の力の脅かし（おびやか）の元に歩むようになるのです。聖書はそのようなアダムと女について、次のようにいいます。アダムと女は自分たちが裸であることに気がついたというのです。それは、神の保護を失った姿であって、神のようになるどころか、「土の塵」へと解体していく、死の力にさらされる姿になったということです。そこでアダムと女は、体全体を覆うために、自分でイチジクの木の実をつづり合わせて身にまといますが、それはみずぼらしく、ただ腰巻にしかけなの

で、体全体を覆うことは出来なかったのです。というのは、すでに触れたように、アダムと女には土の塵へ解体していくという死の力の脅かし（おびやかし）のもとにあります。それを自分たちの知恵と力で覆うことは出来ないからです。

IV

そこで最後のことです。今朝はこの箇所に合わせてコリントの信徒への手紙二を読みました。そこでは、使徒パウロがイエスキリストとコリント教会の人々を結婚関係に譬えて語っていました。イエスキリストがコリント教会に深く結びついているということを伝えているのです。確かに、イエス・キリストだけが、あの「土の塵」への解体という死の力に打ち勝ってくださっています。そして、御自分と共に命に向かって歩むことができるものにしてくださっているのです。ですから、大切なことは、イエス・キリストが深い憐みをもって、他でもない、このわたしに結びついてくださったという恵みを、受け取り続けることなのです。（2025年8月17日主日礼拝）

◇◇◇◇◇

◇◇◇◇◇

◇◇◇◇◇

説教によって生かされる教会

小野寺泉

はじめに

本年の地区教職者会では、これからの北海道中会の伝道を考えるために、参加者各自に、日本キリスト教会の印象を発表してもらうことにした。わたし自身を含め、他教会から入会した教職が今後とも増えることが予想されるため、そのようなことを試みるわけである。そこでここでは、どのような発題をするか、簡単にお知らせしたい。

日本キリスト教会憲法1条1項には次のようにある。「日本キリスト教会は、一つの聖なる公同の使徒的教会に属し、長老制度をとる一団の教会であり、個々の教会および伝道所からなる。」そのように規定されている。

このうち「一つの聖なる公同の使徒的」教会は、ニケヤ・コンスタティノポリス信条に出てくる文言である。平たく言えば、教会が「イエス・キリストの御体である」ことを、そのよう告白したわけである。確かにイエス・キリストの御体は一つであり、聖なるものであり、普遍的に存在し、使徒たちのキリスト証言ないし信仰告白によって存在している。この教会は、目に見えない教会であり、神のみ前に永遠に存在している。しかしまたそれは「目に見える教会」としてこの具体的にこの世界に存在している。

そこで見つめたいのは、目に見えない教会はどのようにして目に見る教会として地上に存在するようになるかということである。その点について憲法は「長老制度をとる一団」の教会といている。し

かし何故ここで長老制度が出てくるのか。またこの他にも会衆制度や監督制度による教会もあるが、何故、「制度」といわれるだろうか。

古代教会は、4世紀ぐらいまでに、目に見える教会の成立について次のように考えるにいたった。地上の教会の成立する「しるし」は、「聖書正典・信仰告白・制度(秩序)の三つ」であるとしたのである。

それはどうしてか。それは「聖書正典・信仰告白・制度」の三つが、イエス・キリストとその御支配を正しく明らかにするからである。かつて和歌山教会にいたときのこと、関川寛牧師(当時、東京神学大学教授)を招いて講演をしていただいたことがあった。その時、関川牧師は、近所に和歌山城があることから、それを譬えに使っておられた。夕方になり、辺りが暗くなると、スポットライトが点灯し、暗闇の中から和歌山城が姿を見せる。それと同じように、聖書正典と信仰告白と制度は、スポットライトのように、三方向からイエス・キリストの御体である教会を照らし出し、浮かび上がらせる。そのように話しておられた。そのことを、もう一步踏み込んで言えば、聖書正典と信仰告白と制度が、説教と聖礼典を正しく定めて、キリスト証言の働きをするので、イエス・キリストが浮かび上がるのである。

この時、聖書正典と信仰告白と制度の三つが共に重んじられることが大切である。例えば、聖書正典のみを重んじると、無教会のような有様になる。信仰告白のみを重んじると硬直した正統主義教会のような有様になる。制度のみを重んじるとローマ・カトリック教会のような有様となる。ローマ・カトリック教会は、ローマ法王を頂点とした聖職者の聖なる序列を屋台骨としているからである。

そういう点では、日本キリスト教会は、どちらかと言えば「制度」を編重しがちである。その結果、聖書正典と信仰告白が同じく重んじられなくなり、説教と聖餐が証言するイエス・キリストが見えにくくなるのである。それに伴って、教会の営みがイエス・キリストの御支配に相応しいかという問いよりも、憲法規則に従っているかどうかの問題となる。そして憲法規則にのっているならそれで良いとなり、思考がそこで停止してしまうわけである。こうして一方でイエス・キリストの御支配を語りつつ、他方で実際の教会の営みは「理論と実践」といった世俗的な概念によって導かれることになる。

しかし本来は、イエス・キリストを基準として、教会の営みがキリストの御支配にふさわしいかどうか問題にすべきであろう。具体的には、何かの課題に直面したとき、「その問題について聖書はどういっているか(聖書正典)。次に代々の教会はどういっているか(信仰告白)、最後に、わたしたちはどう考えて行動するか(制度)」そのような筋道にしたがって教会の営み続けるのである。神学的に考えると、このようなことをいうのである。

I. 7月の教会の歩み

7月2日(水)	聖書を学び祈る会
7月5日(土)	定期委員会
7月6日(日)	主日礼拝 聖餐式執行 月報『ともしび』発行
7月8日(火)	礼拝準備会①
7月9日(水)	聖書を学び祈る会
7月10日(木)	礼拝準備会②
7月12日(土)	礼拝準備会③
7月13日(日)	主日礼拝 代読:委員田畑有希子
7月16日(水)	聖書を学び祈る会 休会
7月20日(日)	主日礼拝 讃美歌練習
7月21日(月)	2階集会室等の清掃・整頓
7月23日(水)	聖書を学び祈る会
7月24日(木)	求道者のための読書会
7月27日(日)	主日礼拝
7月30日(水)	聖書を学び祈る会

◆7月の集会統計 (平均人数、備考欄は延べ人数)

	男	女	計	備考
主日礼拝	2・5	5・5	8・0	求道者:2 他教会:5
祈る会(昼)	1.5	0	1.5	求道者:1
祈る会(夕)	1.0	1.0	2.0	
入門講座	—	—	—	
讃美歌練習	3	9	12	他教会:5

II. 主な決議事項

1) 2025年9月礼拝説教箇所・各礼拝奉仕者について、
 以下のように決めた。

日	聖書箇所	説教者	報告者	奏楽者	献金	受付
7	ヨハネ19:38～42	小野寺泉	宮川美加	宮川美加	田畑有希子	杉山綾子
14	Iコリ2:1～16	小野寺泉	杉山綾子	杉山綾子	宮川美加	田畑有希子
21	創世記3章8～19節	宮川美加	田畑有希子	田畑有希子	田畑有希子	杉山綾子
28	出エ20:1～21	森下一彦	田畑有希子	田畑有希子	杉山綾子	宮川美加

9月 聖餐式奉仕者 パン:宮川美加 杯:田畑有希子

2) 9月14日:奉仕者 委員宮川美加
 準備会 18日(木)、19日(金)

3) 9月15～15(月・火)伝道協議会
 於札幌琴似教会

4) 9月28日(日)問安
 問安使 森下一彦(中会議長、発寒教会牧師)
 礼拝後、教会員との懇談
 ※27日(土)委員との懇談

※先月の「月報ともしび」には、東真紀子姉の維持

献金の表記が「東真紀子(4)」となっていました、
 正しくは東真紀子(1～4)」です。訂正してお詫びを申
 上げます。

III. 7月の教会会計報告

収入の部			支出の部	
科目	金額		科目	金額
献金	1.礼拝献金	23,700	1.礼典費	213
	2.維持献金	55,000	2.基本謝儀	210,900
	3.感謝献金	18,000	3.研究費	14,000
	4.供出献金	-	◆小計	224,900
	5.特定献金	6,000	6.日曜学校費	-
	6.会堂営繕	10,500	7.諸集会費	-
◆小計		113,200	◆小計	-
補助	7.中会補助	320,000	11.光熱水費	43,993
	8.教職補助	200,000	12.通信費	8,253
	◆小計	520,000	14.衛生費	690
その他	12.牧師館費	10,000	17.修理費	9,086
	13.雑収入	-	19.厚生費	32,263
	14.預り金	35,521	◆小計	94,285
	◆小計	45,521	29.預り金	63,157
大・中会個人献金	16.中会受難週	-	30.予備費	-
	17.中会教職B	-	◆小計	63,157
	18.中会ヤスクニ	3,000	36.日曜学校日	11,350
	19.中会秋伝道	-	40.中会受難週	11,000
	20.大会伝道局	-	41.中会教職B	2,000
	21.大会ペンテ	-	42.中会ヤスクニ	5,000
	22.大会共助B	-	44.大会伝道局	9,100
	◆小計	3,000	◆小計	38,450
◆当月収入計		681,721	◆当月支出計	421,005
◆前月繰越金		△2,677	◆次月繰越金	258,039
合計		679,044	合計	679,044

【維持献金】浅水洋子(1～6)、大島昭代(7)、田畑有希子(7)、
 宮川美加(7)、本間一美(7)【会堂営繕】浅水洋子(1～6)、大
 島昭代(7)、田畑有希子(7)、宮川美加(7)、本間一美(7)【感
 謝】田畑有希子【特定献金】浅水洋子(イースター・ペンテ)
 【中会ヤスクニ】大島昭代、宮川美加、本間一美

《編集後記》 ◆八月は例年にない暑さで、「災害級」
 と言われもした。この暑さとどのような因果関係があ
 るのか分からないが、熊が人の生活圏に出没するケー
 スが67件もあったという。専門家の話では、熊がかつ
 てのように人を怖がらなくなったという。熊除けの鈴
 がかえって人の所在を知らせることになり、襲う場合
 もあるらしい。今後も熊が都市部にも出没する可能性
 があるという。そうであれば専門家や地元の猟友会の
 協力を得て、「熊撃ちハンター」の養成し、市町村の職
 員とする必要があろう。◆その点で思い出されるのは、
 『クマにあったらどうするか』(ちくま文庫)の著者姉崎
 等さんの言葉だ。姉崎さんはアイヌ人の熊撃ちハンタ
 ーである。その著書は「熊はわたしにとって(山や熊の生
 態を教えてくれる)先生なんです」という話から始まる。
 実に印象深い。そこには熊を害獣と決めて、力任せに
 退治しようとする姿勢は微塵もない。逆に何日も熊を
 山中を追跡して熊の習性も学び、駆除すべき熊とそう
 ではない熊の区別もつくようになる。◆熊を駆除する
 度に保護団体から苦情の電話が殺到するそうだ。他方、
 アイヌの人々は、人を襲う習性のある熊を「ウエンカ

ムイ＝悪い神」と呼び、そうでない熊を「キムンカム
イ＝山の神」と呼び、きちんと区別している。熊を大
切に思うとは、そのような区別することでもある(泉)。